

## 【第4回三重NST研究会】

### 『急性期医療にS - S P Tの導入を試みて』

済生会松阪総合病院 言語療法室・着本裕子

内科 ・ 清水敦哉

七栗サナトリウム リハ課 ・ 鈴木亨

《はじめに》院内勉強会で嚥下機能の初期評価としてS - S P T・簡易嚥下誘発試験 ( Simple Swallowing Provocation Test ) を知る機会を得、本年6月よりその導入を試みた。ベッドサイドで数分で施行でき、また手順も簡便で患者さんへの負担も少ないことから早期に誤嚥の可能性を把握するには有用な検査であると思われたので報告する。

《手順》 小児用鼻腔チューブを中咽頭まで挿入 蒸留水 0.4m l 注入 ( 3回 )  
蒸留水 2.0m l 注入 ( 1回 ) それぞれで喉頭挙上を観察する

《適応》ベッド上、臥位の姿勢をキープ可能な患者さん

《判定》0.4m l 反応有り 正常

0.4m l 反応無し 2.0m l 注入

2.0m l 反応有り 精査必要

2.0m l 反応無し 異常

《経過》今年6月から9月の3カ月間、27例でS - S P Tを施行した。年齢は57～94歳。その内訳は男性12名、女性15名であった。そのうち7例はPEG適応となり、残る20例は経口摂取可能となった。

《考察》救命救急病院での嚥下障害患者さんには何らかの脳疾患による急性発症と、高齢による全身管理上の問題での発症と大きく二つに分けられる。前者では比較的早期に回復を期待できるものが多い反面、後者では回復と増悪を繰り返すことが多い。そのためにも、入院早期からある程度の予後を想定した医療関係者・介護者への周知が可能である、本検査の導入は有効であると思われた。